何でもわかる

新国語ハンドブック

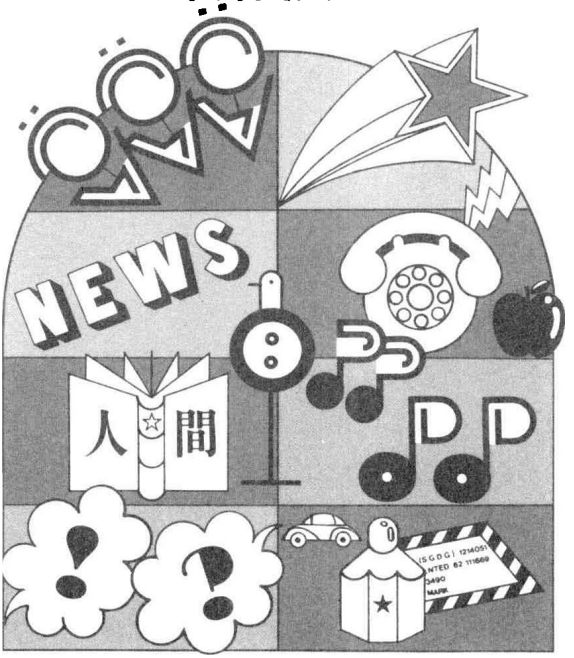
平井昌夫＝著

三省堂

何でもわかる

新国語ハンドブック

平井昌夫 著



三省堂

まえがき

私たちの日常生活で、国語の占める範囲ほど広く、また根深いものはない。読み、書き、話し、聞くという日常茶飯事においてはもとより、広い分野の学術の研究や、複雑な社会生活の上でも、会議の開き方、報告書・商業通信文の作成等々、すべて国語力のじゅうぶんな裏づけなくしては、その真価を発揮することはできない。

この国語の基礎知識は、中学校の義務教育までの課程において学習され、修得されるしくみになっている。そのため学校では、多くの時間をさいて手広く指導しているが、その範囲があまりに広いため、ある事がらを初学年で取りあげ、さらに程度を高くして高学年で学ばせたいばあいにも、種々の事情のためこれができないことも多い。そして、そのまま高等教育に進み、あるいは社会人となり、実地にこれを広く必要とする段階に至って、国語の世界はあまり身近なことでありすぎ、また自国語であるため平易なことのように思いこみ、中途半ぱな知識のままで間に合わせてしまうのは、一生の損失と言えよう。

この書は、こうした事情を考え、中学校で学習すべき内容の事項を整理し、基礎知識から応用知識までを総合的・多角的・系統的に組み合わせた国語学習のエッセンス集ともいうべきもので、次のような特色をもっている。

(1) 国語の学習に必要なあらゆる種類の知識を集めてある。知っておくべきことや調べたいことがあったら、目次や索引でさがして、その個所を見れば、なんでもわかる。

(2) 低学年であっさり習ってきた事がらについてもくわしく深く書いてあるから、国語学習の知識の整理ができるようになっている。おぼえておくべき事がらに、くわしく行きとどいた説明がしてあり、理解を助ける実例もあげてある。

(3) 国語についての新しい研究やすぐれた説き方がふんだんに取り入れられ、しかも統一のあるように編集してある。大ぜいの人びとが書いたものを編集した本であると、説き方がまちまちだったり、むじゅんしたりしがちである。

(4) 実例がたくさん集めてあるので、練習問題としても使える。問題として出されるような事がらは、実例として出ているので、それらをしっかりおぼえれば、入学試験の練習書としても不足がないように考えてある。

(5) 国語の教科書で勉強するには足りない点をおぎなうために、どの教科書にも出ているたいせつな事がらが全部集めてある。したがって、どんな教科書を使っていてもぜひ持っていなければならない必読の国語参考書である。

(6) 国語学習の内容の説明だけでなく、その内容を身につけて国語の力とするための方法も書いてあるので、国語の実力をつける生きた参考書である。それゆえ、本書を、いつもしっかり読んでいれば、しぜんに国語の実力がのび、国語の実力がのびると、ほかの教科の力ものびてくる。ほかの教科の実力は、国語の実力にささえられてのびるものだからである。

現在教室で国語を学んでいる中学生諸君は、本書によってその理解をいっそう正確にすることができ、さらに上級の人びとにとっては、「これだけは知っておかなければならない。」という入学試験・就職試験のよりよき手引きとなるであろう。そして一般社会人にとっては、公私のあらゆる場面において、自己の能力をじゅうぶんに、たやすく発揮するための備忘の書として役だつことを信ずるのである。

一九八二年二月一〇日

平井昌夫

目次

第一部　文字と言葉……1

一　文字と言葉……2

〔一〕世界の言語……2

〔二〕文字の発達……3

〔三〕現代の文字……4

二　漢字の性質……5

〔一〕漢字の種類と数……5

〔二〕漢字の構成……5

〔三〕漢字の部首……6

〔四〕漢字の筆順……9

[1] 漢字の筆順の基本的なきまり　9

[2] 書きあやまりやすい漢字の筆順　11

〔五〕漢字の画数……13

[1] 部首の画数　13

[2] 画数のわかりにくい漢字　15

〔六〕漢字の読み方……15

[1] 音と訓　15

[2] 漢字の読み方　16

三　漢字の使い方……17

〔一〕意味の反対または対応する漢字……17

〔二〕二つ以上の音で読む漢字……19

〔三〕形が似て音がちがう漢字……23

〔四〕まちがいやすい同音の漢字……27

〔五〕二つ以上の訓で読む漢字……32

〔六〕意味によって漢字を書き分ける同じ読み方の単語……35

〔七〕書きまちがいやすい漢字……50

〔八〕重要な書き取り漢字……52

四　仮名……62

〔一〕仮名の性質……62

[1] 仮名の種類と役割　62

[2] 平仮名と片仮名の字源　62

〔二〕平仮名の使い方……63

[1] 漢字と平仮名を使い分ける単語　63

[2] 平仮名で書く単語　66

〔三〕片仮名の使い方……66

[1] 片仮名で書く単語　68

[2] 片仮名で書く習慣が広がってきた単語　69

[3] あやまりやすい外国語・外来語の書き方　70

五　言葉……72

〔一〕単語……72

[1] 単語の数　72

[2] 単語の意味　72

〔二〕漢語……73

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

[1] 漢語の構成法 73
[2] 四字の漢語の構成法 76
[3] 重要な四字の漢語 76
[4] 同じ音で意味が似ている漢語 83
[5] 同じ音で意味がちがう漢語……95
〔三〕 意味のよく似た言葉……113
〔四〕 反対の意味の言葉……115
[1] 反対または対応する漢語 115
[2] 反対の意味の和語 120
〔五〕 意味を取りちがえやすい単語……120
〔六〕 漢字を使える熟字訓……122
第二部　言葉のきまり……123
一　国語の知識……124
〔一〕 国語の特質……124
[1] 国語の特質 124
[2] 情報化社会に必要な国語の力 126
〔二〕 話し言葉と書き言葉のちがい……128
〔三〕 生活語・方言・共通語・標準語……130
[1] 生活語 130
[2] 方言 130
[3] 共通語 131
[4] 標準語 131
〔四〕 敬語の使い方……131
[1] 敬語の種類と使い方 131
[2] これからの敬語の方針 133
二　文法……137
〔一〕 文法のまとめ……137
[1] 国語の発音 137
[2] 言葉の単位 139
[3] 段落の構造 143
[4] 文の構造 144
〔二〕 品詞の性質と用法……148
[1] 名詞 148
[2] 動詞 149
[3] 形容詞 152
[4] 形容動詞 153
[5] 連体詞 154
[6] 副詞 154
[7] 感動詞 156
[8] 接続詞 156
[9] 助動詞 157
[10] 助詞 161
〔三〕 まぎれやすい品詞……163
三　表記のきまり……171
〔一〕 現代仮名遣いのきまり……171
[1] 助詞の「へ・は・を」の書き方 171
[2] 「じ・ぢ・ず・づ」の使い分け 171
[3] 長音の仮名遣い 172
[4] つまる音の書き方 174
〔二〕 送り仮名のつけ方……174
[1] 単独の語 174
[2] 複合の語 178
[3] 付表の語 180

〔三〕くぎり符号とくり返し符号の使い方……181
[1] くぎり符号の使い方　181
[2] くり返し符号の使い方　184
〔四〕ローマ字文の書き方……184
[1] ローマ字のつづり方　185
[2] 分かち書きのしかた　187

第三部　国語の学び方……191
一　読むことの学習……192
〔一〕図書館の利用のしかた……192
[1] 図書館を利用するときの心得　192
[2] 図書館での本の借り方　192
〔二〕本を読むにあたっての心得……194
[1] 本の取り扱い方　194
[2] 本や雑誌を選ぶ基準　194
[3] 辞典・参考資料の種類と特色　195
[4] 国語辞典の引き方　196
[5] 漢和辞典の引き方　197
[6] 索引の使い方　197
〔三〕本の読み方……198
[1] 黙読に上達する方法　198
[2] 音読のしかた　199
[3] 本に出ている知識や情報の整理のしかた　199
〔四〕文章の理解のしかた……200
[1] 文章の種類　200
[2] 文章の内容による種類　201
[3] 知らない語句の処理のしかた　202
[4] 文の理解のしかた　203
[5] 段落の理解のしかた　204
[6] 文章の組み立てや述べ方に即した読み方　206
[7] 読解のしかた　208
[8] 文章の読解の方法　223
〔五〕新聞の読み方……227
[1] 新聞の種類と作り方　227
[2] 新聞の読み方　228
〔六〕論文・論説文の読み方……230
二　話すこと、聞くことの学習……232
〔一〕話し方の基本……232
[1] 話し方の原則　232
[2] 会話　233
[3] 会話の心得　236
[4] 大ぜいの人々の前での話し方　237
〔二〕聞くこと……238
[1] 聞く目的　238
[2] じょうずな聞き方　239
[3] 聞き方の基本　242
〔三〕応対のしかた……243
[1] あいさつのしかた　243
[2] 紹介のしかた　244
[3] 面接の話し方　245
[4] 電話の話し方　246
〔四〕人に知らせる話し方……249

[1] 人に説明する話し方 249
[2] 発表の話し方 250
[3] 報告の話し方 252
〔五〕人を説得する話し方……253
[1] 説得の話の特色 253
[2] 説得力のある態度 254
[3] 説得の話の段階 254
[4] 説得の方法 254
〔六〕人を楽しませる話し方……255
[1] 感想や物語の話し方 256
[2] 朗読のしかた 256
〔七〕話し合いや討論のしかた……258
[1] 話し合いや討論や会議のいろいろな形式 258
[2] 話し合いや討論の進め方 259
[3] 司会者の仕事 260
〔八〕会議の開き方……264
[1] 会議の進め方 264
[2] 議長の任務 267
[3] 書記の仕事 268
[4] 動議の提出 268
[5] 議事記録の項目 269
〔九〕テレビやラジオの放送の聞き方と学校放送のしかた……270
[1] テレビやラジオの放送の聞き方 270
[2] 学校放送のしかた 271
三　作文の学習……273
〔一〕わかりやすい文章の基準……273
〔二〕原稿用紙の書き方……275
〔三〕文章を書くうえの心得……276
[1] 文章を書くための準備 276
[2] 単語の選び方 281
[3] 文の作り方 282
[4] 段落の作り方 283
[5] 表現を強める方法 284
[6] 推考の基準 285
[7] 文章の書き方の基本 286
〔四〕文章の書き始めと書き終わり……288
[1] 文章の書き始め 288
[2] 文章の書き終わり 290
〔五〕いろいろな述べ方……291
[1] 描写する述べ方 291
[2] 説明する述べ方 291
[3] 議論する述べ方 292
〔六〕読書メモの書き方……292
[1] 読書メモの取り方 293
[2] 個条書きのしかた 293
〔七〕社交の手紙の書き方……294
[1] 手紙を書くときの心得 295
[2] 社交の手紙の形式 295
[3] 封筒の書き方 299
[4] はがきの書き方 300
〔八〕実用の手紙・電報文の書き方……300
[1] 実用の手紙の書き方 300
[2] 電報文の書き方 302
〔九〕履歴書・届書・願書の書き方……303

[1] 履歴書の書き方 303
[2] 届書の書き方 307
[3] 願書の書き方 307
〔十〕 ニュース記事・宣伝文・広告文の書き方……308
[1] ニュース記事の書き方 308
[2] 宣伝文・広告文の書き方 310
[3] 掲示文の書き方 310
[4] 標語の書き方 311
〔十一〕 記録・リポート・論文の書き方……312
[1] 記録の書き方 312
[2] リポートの書き方 312
[3] 論文の書き方 313
〔十二〕 物語・小説・脚本・随筆・日記の書き方……314
[1] 物語・小説の書き方 314
[2] 物語・小説の書き始めと書き終わり 315
[3] 脚本の書き方 317
[4] 随筆の書き方 318
[5] 日記の書き方 319
〔十三〕 左横書きの書き方……321
[1] 左横書きの長所 321
[2] 左横書きの書き方 321

第四部　文学の学習……323

一　文学作品の読み方……324
〔一〕 物語・小説・伝記の読み方……324
[1] 物語・小説の特色 324
[2] 物語の種類 327
[3] 小説の種類 328
[4] よい物語・小説の選び方 330
[5] 物語・小説の読み方 332
[6] 伝記の読み方 335
〔二〕 紀行文・随筆の読み方……336
[1] 紀行文の読み方 336
[2] 随筆の読み方 336
〔三〕 戯曲の読み方……337
[1] 戯曲を読むための知識 337
[2] 戯曲の読み方 338

二　俳句の読み方……339
〔一〕 俳句を読むための知識……339
[1] 俳句の歴史 339
[2] 季題 341
[3] 句切れと切れ字 342
[4] 自由律俳句 343
[5] 俳句の味わい方 343
[6] 川柳との違い 344
〔二〕 近世の俳句……344
〔三〕 現代の俳句……348

三　短歌の読み方……353
〔一〕 短歌を読むための知識……353
[1] 和歌から短歌へ 353
[2] 短歌の読み方 356
[3] 枕詞 359
[4] 掛詞 359
[5] 縁語 360
[6] 序詞 360
[7] 句切れ 360

[8] 倒置 361
[9] くり返し 361
[10] 字余り・字足らず 361
[11] 韻をふむこと 361
[12] 体言止めと連体止め 362
[13] 狂歌との違い 362
(二) 歴代の和歌……363
[1] 上代・奈良時代 363
[2] 平安時代 367
[3] 鎌倉・室町時代 369
[4] 江戸時代 371
(三) 現代の短歌……372
四　詩の読み方……380
(一) 詩を読むための知識……380
[1] 詩の特色 380
[2] 内容 382
[3] 形式 385
[4] 言葉 386
(二) 詩の味わい方……387
[1] 詩の文章の特色 387
[2] 詩の味わい方 387
(三) 主要な詩人と作品……389
五　主要作者一覧……415
(一) 物語・小説・随筆・戯曲の作者……415
[1] 奈良時代 415
[2] 平安時代 415
[3] 鎌倉・室町時代 415
[4] 江戸時代 416
[5] 明治時代以後 417
(二) 随筆・評論・論説の作者……421
(三) 外国の作者……423
[1] アメリカ 423
[2] イギリス 425
[3] フランス 427
[4] ドイツ 429
[5] ロシア 430
[6] イタリア 431
[7] その他 431
六　日本文学の歴史……433
(一) 日本文学の時代区分……433
(二) 各時代のあゆみ……433
[1] 大和・奈良時代 433
[2] 平安時代 434
[3] 鎌倉・室町時代 436
[4] 江戸時代 438
[5] 明治・大正・昭和時代 441
(三) 日本文学史年表……442

第五部　古典の学習……451

一　古文の読み方……452
(一) 仮名遣い……452
(二) 語句……453
[1] 現代口語文と語形は同じでも意味がちがう語句 453
[2] 現代口語文では用いられなくなった語句 454
[3] 古文特有の語句 454
[4] 注意すべき用法の語句 455
(三) 文法……455

[1] 名　詞　455
[2] 副詞・連体詞・接続詞・感動詞　456
[3] 動　詞　457
[4] 形容詞　458
[5] 形容動詞　459
[6] 助動詞　459
[7] 助　詞　460
[8] 係り結び　461
〔四〕古文のおもな作品の読み方……462
[1] 奈良時代　462
草那芸の剣（「古事記」）　462
[2] 平安時代　463
かぐや姫（「竹取物語」）　463
春はあけぼの（「枕草子」）　464
馬盗人（「今昔物語集」）　466
[3] 鎌倉時代　468
ゆく川の流れ（「方丈記」）　468
ちごのかひもちひするにそら寝したること（「宇治拾遺物語」）　470
那須の与一（「平家物語」）　471
榎の木の僧正（「徒然草」）　473
高名の木のぼり（「徒然草」）　473
[4] 江戸時代　475
平泉（「おくのほそ道」）　475
二　漢文の読み方……477
〔一〕漢字の読み方……477
[1] 漢字を読む二つの方法　477
[2] 訓読の習慣上きまっている読み方　478
[3] 特別な送り仮名をつけて読む漢字　479
〔二〕語　順……479
[1] 主述の関係　479
[2] 修飾の関係　479
[3] 並列の関係　479
[4] 補足の関係　480
[5] 認定の関係　480
〔三〕訓　点……480
[1] 送り仮名　481
[2] 返り点　482
〔四〕特殊な語……483
[1] 前置詞　483
[2] 接続詞　484
[3] 終末詞（終尾詞）　485
[4] 助動詞　486
[5] 認定を表す語　487
[6] 副　詞　489
[7] 疑問詞　489
[8] 再読文字　490
〔五〕漢文の基本文形……491
[1] 主語＋述語　491
[2] （主語）＋述語＋目的語　492
[3] （主語）＋述語＋補語　492
[4] 主語＋述語＋目的語＋補語　492
[5] 主語＋述語＋補語＋目的語　492

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6 否定形 492
7 反語形 492
8 使役形 493
9 受身形 493
10 仮定形 493
11 対照形 493

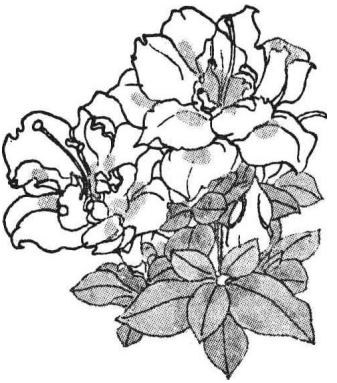
三 漢詩の読み方 …… 494

（一）古体詩 …… 494
（二）近体詩 …… 496
1 律詩 497
2 排律 498
3 絶句 499
（三）韻律 …… 501
1 音数 501
2 平仄 501
3 押韻 502

第六部 重要な故事・成句・ことわざ集 …… 503
《付》名言集 …… 544
索引 …… 545

第一部

文字と言葉



一　文字と言葉

〔一〕　世界の言語

フランスの学士院の推定では、世界に二千七百九十六種の言語が使われているとされているが、正確には不明である。普通は二千五百種ぐらいと考えればよい。もっとも多くの使用者（一九六三年の推定では七億人）をもつのは中国語、その次が英語（二億五千万人）、その次はロシア語（二億人）である。また国際的にもっとも広く使われているのは英語である。

一つの国に一つの言語というばあいは少なく、二つ以上の言語を公用語（公けに用いられている言語）とする国が多い。スイスでは、ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロマンシュ語（ラテン語から変わってきた方言）の四つが国語となっている。ベルギーでも、フラマン語（オランダ語の方言）とフランス語が公用語だが、ドイツ語も使われている。

一つの言語がいろいろな国で使われていることもある。スペイン語は、スペインのほか、アルゼンチン、ボリビア、チリ、コロンビア、エクアドル、パラグァイ、ペルー、ウルグァイ、ベネズエラ、メキシコ、キューバ、パナマなど中南米の二十か国で公用語となっている。

世界の言語を文法上の見方から次の四つに分けることがある。

① 孤立語―語形が変わらず、語の順序が文法の役をする。中国語・チベット語など。

② 屈折語―語形が変わることで文法上の関係を示す。英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語など。

③ 膠着語―語形も変わるが、付属語によってにかわ（膠）のように語と語をつなぐ。日本語・朝鮮語・トルコ語など。付着語ともいう。

④ 抱合語―動詞のなかに主語や目的語が抱き合わされる。アイヌ語・エスキモー語など。

世界の言語を、発音・単語・文法などからいくつかにまとめると、語族（言語の親族）と呼ぶ。

◆世界の言語◆

1　インド・ヨーロッパ語族（中央アジア、ヨーロッパ）
▼ロシア語、ポーランド語、ブルガリア語など。
▼ギリシア語、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語など。
▼デンマーク語、スウェーデン語、ドイツ語、オランダ語、英語など。

2　ハム・セム語族（アラビア、アフリカ）
▼エジプト語、アラビア語、エチオピア語、ヘブライ語など。

3　ウラル・アルタイ語族（アジアの一部、ヨーロッパの一部）
▼フィンランド語、ハンガリー語、トルコ語、モウコ語など。

4　インドシナ語族（シナ・チベット語族）（アジアの東部）
▼シナ語、チベット語、ビルマ語、タイ語など。

5　マライ・ポリネシア語族（東南アジア、オセアニア）
▼マライ語、ポリネシア語など。

6　南アジア語族（インドシナ半島、マライ半島）
▼アンナン語、モンクメール語、ベトナム語など。

7　ニグロ・アフリカ語族（アフリカ）
▼ホッテントット語、ブッシュマン語など。

8　ドラビダ語族（インド）
▼ドラビダ語など。

9　アメリカ・インディアン諸語（南北アメリカ）
▼いろいろあるが、おたがいの親族関係が認めにくい。

10　孤立の諸言語（ほかの言語に関係づけにくいもの）
▼日本語、朝鮮語、アイヌ語、バスク語、タスマニア語など。

〔二〕文字の発達

世界の二千五百種ぐらいの言語のうちで、その言語を表す文字をもっているのは二千種ほどである。この文字も、初めは絵または絵に近い文字（絵文字）であった。エジプトの文字、バビロニアの文字、アッシリアの文字などそうである。中国の漢字も初めは絵文字

であった。絵文字を簡略化して、物の形をかたどった（象った）文字つまり**象形文字**ができた。象形文字は、物事やその言葉の意味を表すので、**表意文字**とか**表語文字**と呼ばれる。

表意文字とか表語文字は見るのに便利であるが、新しい事物がふえればそれだけ文字をふやさなければならず、形のないものは表すのが困難である。こうして、一定の音を表す文字が案出された。これが**表音文字**である。

表音文字のうち、「か」は、ローマ字で書くとkaのように、二つの音の結合つまり音節である。したがって、仮名のような文字を**音節文字**という。ローマ字のように一つ一つの音を表す文字を**単音文字**という。

〔三〕　現代の文字

現代の文明国では、イギリス・フランス・ドイツ・イタリア・アメリカ・スペインなどみな**ローマ字**を使っている。ソ連邦ではローマ字と同じ性質（単音文字）の**ロシア文字**を、ギリシャではやはりローマ字と同じように単音を表すギリシャ文字を使っている。単音文字では、どの文明国でも、文字数が六十字を越えることはない。

朝鮮では、北の朝鮮民主主義人民共和国では、**ハンクル**（大いなる文字の意味）と呼ぶ母音文字十一字、子音文字十四字、合計二十五字の単音文字だけを使っている。南の大韓民国では、漢字とハンクルを併用してきたが、ハンクルだけにする方針になった。

中国では、漢字とローマ字を使っている。漢字は、「常用字」（わが国の常用漢字にあたる。）として千五百字、「補充常用字」として五百字、合計二千字をきめている。字体も思いきって簡略化した**簡体字**（略字）を使っている。書き方も左横書きに統一している。台湾では、これまでどおりの字体の漢字を使用し、略字も横書きも認めない。

わが国では、漢字と平仮名・片仮名を使い、ローマ字も学校教育で教えている。漢字の使い方や数や字体にはわが国だけのくふうが考えられている。

二　漢字の性質

〔一〕漢字の種類と数

漢字は中国で発明され、長い年月の間に形も変わり、数もふえてきた。日本へ伝わったのち、日本人が新たに作った漢字もある。現在では、**楷書**と呼ばれる字体が普通に用いられている。手書きのときには、楷書を少しくずした**行書**という書体が用いられ、時にはさらにくずした**草書**が用いられる。

漢字はその数がおよそ五万字あり、そのうち一万字ほどが使われ、日常生活でよく使われるのは二千字ほどである。昭和二十一年に**当用漢字**一、八五〇字が制定され、義務教育で学習する漢字の基準がきまった。昭和五十六年には、義務教育を終えた国民が知っている目安として、**常用漢字表**の一、九四五字がきめられた。**音訓表**も当用漢字表を土台として、新しい漢字だけが制定され、使用度や機能度の高いものが選ばれた。新聞雑誌も常用漢字の範囲内で書かれている。

漢字の字体についても、昭和二十四年に新字体が制定され、字画の多い漢字を簡略化したり、いくつかある字体を統合したり、印刷字体と筆写字体を一致させたりした。

〔二〕漢字の構成

漢字は、中国では、構成法や使用法を六つに分けてきた。これを六書という。

1　構成法の点で、次の四つに分ける。

①　**象形**（物の形にかたどって作った文字）　漢字のもとはみなこれである。

〈例〉　日　田　水　目　口　牛　魚

②　**指事**（形のないものや物事の性質を指し示した文字）　たとえば、「本」「末」は「木」をもとにして、その位置を示すなど。

③　**会意**（象形文字を二つ以上組み合わせて、新しい意味を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com